

葡萄嶺

これより全く山中に入りて、遂に葡萄嶺の險に達す。この嶺は數個の小嶺より成り、其中間に葡萄の一驛あり。これより烏帽子山の東麓を廻り、大每より間瀬の海岸に出るまでは、里程二里餘あり。かくて、路は再び海岸に添ひ、府屋町を過ぎて、遂に羽前の國鼠ヶ關に達す。

粟生島は瀬波港の海上七里餘にありて、牧畜を以て開ゆ。島は周圍四里餘、中央に小紫岳あり。島内を釜屋粟浦前濱の諸部落に分ち、粟浦最も人口に富めり。

佐渡島

佐渡島は日本海中の一大島にして、行政區劃上、佐渡郡となし、新潟縣の管轄に屬せり。大佐渡小佐渡の兩山脈は東北より西南に走り島の南北に並列し、其中央に横れる平原を國中といふ。周圍五十三里餘、面積五十六方里餘、戸數二万千、人口十一万餘を有せり。新潟港を越佐汽船會社の汽船にて出帆すれば、海路約五時間にして國中平原の東北端にある夷港に達すべし。夷港は湊町を合せて一に兩津町と稱し、其の間、加茂湖と海水と相通する處に、兩津橋と稱する一橋を架せり。此の附近風景殊に絶佳にして、西に加茂湖の

兩津町

晴波鏡の如くなるを見、東に日本海の怒濤を望み、首を搔れば、金北山の高嶺は巍々として相連り、人をして佇立願望去るに忍びざらしむ。●兩津町は人口四千餘を有し、商業活潑なり。夷港(第四十三圖甲乙)は日本海航行の汽船の避難所として有名なるもの、新潟の沖にあるものも、一度暴風に遭逢せば、皆此地に難を避くるを例とす。是を以て船舶常に多く來り集る。

加茂湖は一に越の湖と稱し、周圍二里餘を有す。風景の美なるを以て世に聞ゆ。而して其の東岸權岬はことに眺望のすくれたるを以て名あり。又、湖の西岸に木崎あり、岬端に一小島あり、岩杵島姫の小祠あり。潟上村に牛尾神社あり。又長江村に熱串神社あり。共に島中著名の古祠なり。梅津村に梅津古城址あり。

兩津町より國中の平野を横斷せる道路を西南に進めば、二里にして金澤村に至る。千種村は往昔の千種の里にして、順徳天皇が花園を設けさせ給ひし處なりといふ。金澤村に明治紀念堂(第二十二圖乙)あり。廿七八年役に戦死したる將士を吊ふ爲に明治廿九年に設けられたるもの、同三十年には開導館と稱す

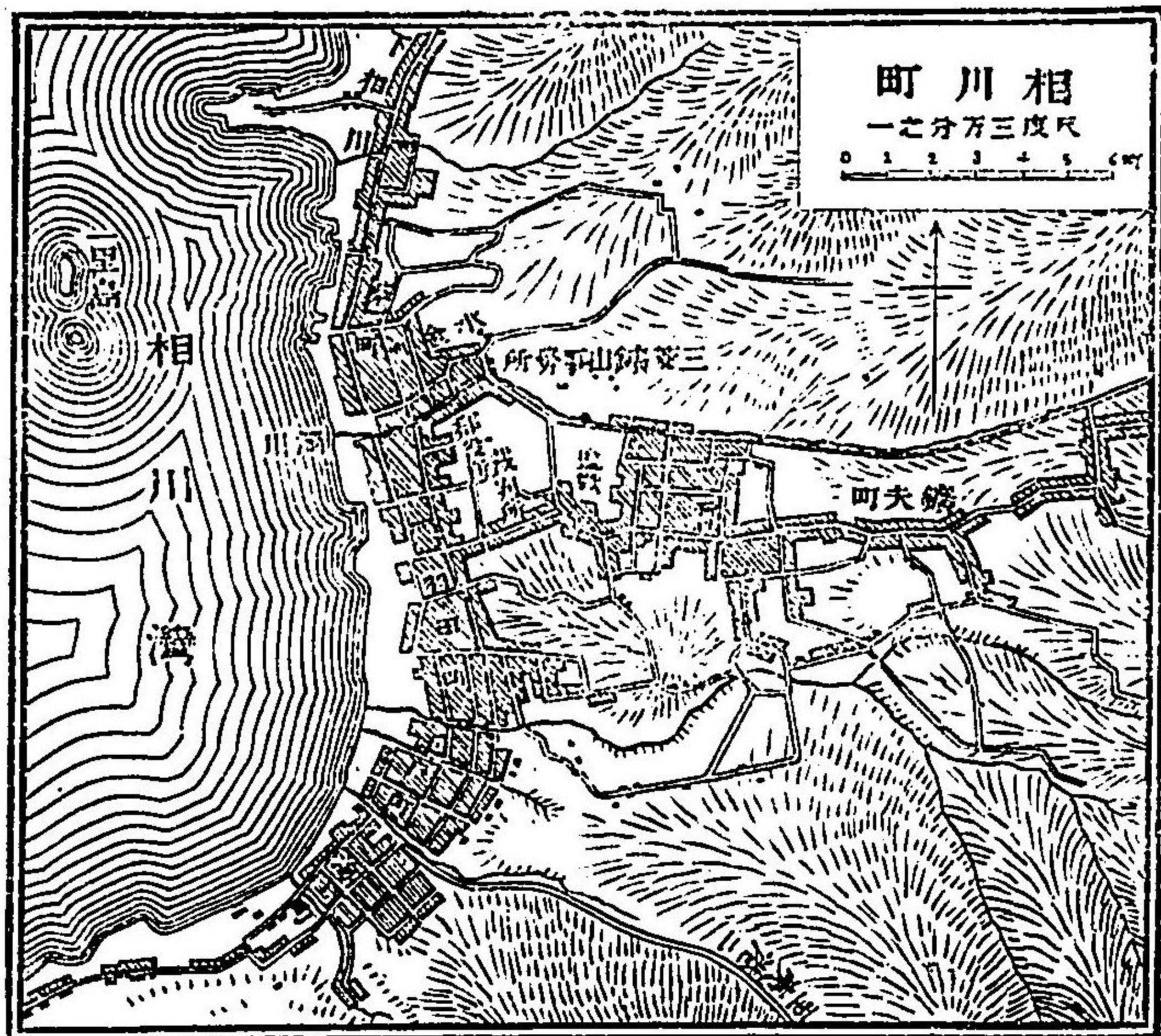
明治紀念堂

る一種の小博物館を設立し、州民の志氣を鼓舞し、其智識開發の一端に供するを主旨とす。又村に古刹西蓮寺あり。又、村の附近に、順徳帝和泉の御所址、往昔の國造大荒木直の治所なりし遺址あり。

これより西南に行くこと二里にして、眞野灣頭の名邑河原田町に至る。町は人口二千を有し、市街整正、人烟稠密なり。町に諏訪神社あり。又、二宮村に東福城址あり。中學校は高台の地にありて眼下に眞野灣を望み、風景佳なり。當島最初の守護本間能久の古城址あり。同村大字一ノ澤に、僧日蓮配居の地なる法華山妙照寺あり。順徳帝の假宮を建てさせられる八幡の御所址は、下八幡村にあり。當年のことを思ひて、暗涙轉た禁する能はさるものあり。

これより道路は二つに岐れ、一は右して相川町に至り、一は左して新町を経て小木町に至る。右路を辿れば一里にして澤根、二里にして相川町に達す。この途中中山峠に俚俗龜石と稱するものあり。蓋し泥灰質白色岩の龜甲石に外ならざるなり。又此附近に多く魚類の化石を産す。●相川町は島中第一の都邑にして、人口一万二千五百餘を有し、市街整正商業活潑なり。此の地は明

相川町



二十餘、汽力七百馬力に過ぐ。最初は官行なりしが後帝室の御料となり、後

治の初年相川縣を置かれし地に
して、今、官衝に郡役所區裁判
所等あり。有名なる金鑛山(第二
十九圖乙)は此の地の東北にありて、
坑口二十餘箇處に分れ、其の近
きものを高任坑大堅坑といふ。
此の鑛山は慶長年間の開堀より
今に至りて盡きず、明治の初年
よりは採鑛方を洋式に改め、坑
門を五ヶ所に定め、深度四百尺
より千尺に達し、坑道の延長五
里餘に達し、搗鑛淘治分拆等十
餘ヶ所あり。汽鑛を供ふること

岩崎家の所有に歸し、今日に至れり。蓋し本那鑛山中屈指のものたるを失は
ざるべし。

眞野入江

眞野山陵

相川の南に二見港あり。眺望絶佳、風景明媚なり。
河田原町より南する一路を傳へば、眞野の入江は美しき風景を其の前に展
開し、道路は多く海岸を縫ひて、一步に一景を生じ、一景に一致を加ふるの
概あり。順徳帝が「思ひきや雲の果てまで流れ来て眞野の入江に朽ち果てんと
は」と咏じ給ひし御製を思ひつゝ、此間を行けば、誰か涙に袖を濡さざらん。新
町はこの風光明媚なる入江に臨める一邑にして、眞野村はこれを距ること一
里、地に、眞野神社及び眞野山陵(第十六圖甲)あり。前者は順徳帝を奉祀せるも
の、今縣社たり。後者は順徳帝の御陵にして、帝が北條義時の爲めに承久三
年此島に流謫せられ、二十二年を此の絶海の孤島に經させ給ひしは、皆な人
の知るところ、帝の崩去せられしは仁治二年、聖壽四十有六、當時供奉の臣
池清範御遺骸を此の地に納め、方八間の陵を築けり。明治維新後、其の荒廢
せるを理め、大靈招迎の式を擧げ、十二年今上北巡に際しては、特に富小路

侍従を遣はし御代拜を爲さしめ給へり。山陵の奥一里餘に、眞野御所址あり。また同村大字阿佛坊に日蓮宗の巨刹妙宣寺あり。其の境内に日野中納言資朝の墓(第十六圖丙)あり。阿新九が父の仇を報ぜんとして身を潜めたりといふ阿新隠松(第四十三圖乙)あり。其の他、同村大字國分寺に天平九年に創建せられたる本島最古の名刹國分寺あり。

これより海岸を南に行くこと三里餘にして、小木港(第四十二圖乙)あり。本島南端の一港にして、越後の出雲崎との間に汽船の往復あり。且、灣内水深く、よく西北風を保障するに足るを以て、各種の船舶來て此港に碇泊し、帆橋常に林立せり。

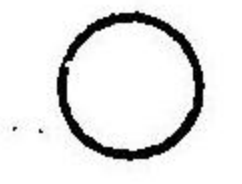
小木港より東海岸を傳へば、赤泊の小港あり。出雲崎との汽船の往復あり。これより東北すれば、松ヶ崎岩首水津河崎等の諸名邑あり。されど多くは半漁半農の村落にして記すべきこと少し。

大佐渡は金北山の山脈東北より西南に連りて、其の脊髓を爲し、其の西海岸十餘里、夷町より彈崎に至る間を内浦と稱し、其の東海岸、即ち相川町よ

り大野龜に至る間を外浦といふ。共に有名なる漁場にして、鮑、烏賊、鰹等の漁獲頗る多し。外浦の海岸は道路險惡なれども、海汀屈曲多く、島嶼所々に散點して、風景のすぐれたる處少なからず。後尾のカグノ神、大倉のワシリ矢柄の掛橋、關の膳棚、願の扇岩、ク、リ岩ニツ龜等は其奇岩怪石の著しきものなり。外海府村に至れば、奇岩洞窟愈々出て、愈々奇に、怒濤の掀翻、大洋の澎湃、眞に大觀たり。

大日本地誌卷五終

五二三	四二七	四一七	四一三	四一三	四一三	四〇九	三九四	全	三九三	三三四	三三二	三〇六	一六七	一六一	一五一	其
八	九	一	一	七	一	九	一	全	二	一	一〇	二	八	二	三	行
に爲す	連絡	始め	及びさるな	初年の至	眞宗につづては	其謫所	第四師團長能久親王	梅津郡養老郡	富山縣	人氏の香血	後土御帝	女を娶り	富士火山	八	岸にあり	誤
と爲す	連絡	始め	及びさること	初年に至り	眞宗につづくは	其謫所	第四師團の一部は能久親王	海津郡養老郡	岐阜縣	人民の香血	後土御門帝	女を娶り	富士火山脈	七	岸にありし	正



明治三十九年八月三十日印刷
明治三十九年九月三日發行

定價金貳圓五拾錢

大橋區
著作權所有
第五卷 奥付

編者 山崎直方
編者 佐藤傳藏

發行者 大橋新太郎

東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 飯田三千太郎

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發兌元

東京日本橋區本町

博文館

博文館發兌大日

各册大判背皮金文入字ス美本

第二卷 奥羽

方面地圖(着色版)八枚
寫真銅版八十一頁二百餘個入
紙數九百餘頁正價金貳圓五拾錢
小包 料金拾五錢

第二卷

それ、奥羽の地たる、山嶽重疊、河川縱横、文物交通は、關東地方に及ばざれど、自然の壯大、地形地勢の複雑なるに至りては、本邦多く其比を見ず。火山蟠居の數甚だ多く、海灣出入の線頗ぶる繁く、地質また錯雜して、學者の研究に値ひせるもの極めを多し。沿革は此地方特色なる石器時代より、蝦夷と大和民族との争闘史、戰國割據の擾亂に至りて親切丁寧を極め、産業鑛業、林業、水産に於て殊に詳密なる叙述を試みたり。其他政治宗教教育地方誌に關しても皆最近の材料を用ひて、勉めて簡明ならんとを期せり。また第一卷に比して精巧に、新に地質地形の二圖を添へて閱覽に便ならしむ。

第一地編文

第一章地形(概説、磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後)第二章海洋並に海岸線(太平洋沿岸、津輕海峽及陸奥灣、日本海岸、海流及潮、庄内地震、陸羽地震、三陸海嘯)第三章地質(汎論、始原大統、古生大統、中生大統、新生大統、噴出岩、温泉)第四章氣象(氣温、氣壓、風向及吹風力、降水、霜雪、湿度)

第二人

第一章沿革(石器時代—佩玉時代—上古拓植移民時代—中古豪族勃興の時代—鎌倉時代—南北朝時代—戰國時代—豊臣氏時代—徳川時代—明治維新第二章政治宗教(行政、司法、軍事、教育、宗教、交通)第三章産業(農業、

本誌地全

總紙數約壹萬頁每卷地圖寫眞數十枚入

編文

(林業)、(水産)、(工業)、(鑛業)、金屬鑛類—非金屬鑛類、(商業)、商業都會—商業機關—會社事業—金融機關

第三地方誌

福島縣 白河町○梁川町○猪苗代町○若松市○喜多方町○坂下町○高田町○川島町○平町○四倉町○原の町○中村町○福島町外數項
宮城縣 白石町○岩沼町○鹽竈町○仙臺市○吉岡町○吉田町○古川町外數項
岩手縣 一ノ關町○平泉○水澤町○花巻町○盛岡市○岩手山○一戸町○福岡町○遠野町○釜石町外數項
青森縣 三戸町○八戸町○青森市○弘前市○黒石町外數項
山形縣 米澤市○赤湯町○上の山町○山形市○天童町○楡岡町○大石田町○舟形町○小松町○酒田町外數項
秋田縣 院内町○秋田市○能代町○花輪町○土崎港外數項

銅版地圖

○奥羽東北地方地形概圖○磐梯火山の圖○岩手火山の圖○岩木火山の圖○松島灣附近の圖○奥羽東北地方地質概圖○平泉沿革圖○仙臺市の圖……(以上)
藏王火山遠望○吾妻火山○駒ヶ嶽遠望○岩手山○八甲田山○國造配置の圖
○月山遠望○森吉山○寒風山○地質層位圖○古器物○福島町地圖○白河町地圖○平町地圖○青森町地圖○盛岡市地圖○秋田市地圖○山形市地圖○米澤市○弘前市地圖外數圖

日大兌發館文博

本美スロク入字文金皮背判大册各

第三卷 中部

方面地圖(着色版)九枚
寫真銅版八十六頁二百餘個入
紙數壹千頁正價金貳圓五拾錢
小包送料金拾五錢

第三卷

中部の地たる海岸線は關東奥羽に比して及ばざるも火山脈の形状、河流の壯大頗る研究に値すべきものあり、殊に此の地方には中京名古屋の如き乃至は静岡長野の如き繁盛なる都會を有するが故に、人文發達の途に注目すべき事多く、沿革はまた徳川時代の争鬭史に富み産業は工業、鑛業、林業に於て他地方に卓越し、政治、宗教、教育、地方誌に關して記すべき事甚だ多し。今此篇を編むに當つて、著者は凡て最近の材料に依り、勉めて詳細に又努めて明亮ならん事を期しぬ。其の如何に苦心經營の結果に成りたるやは、本書を細く人の必らず首肯する所ならん。地形地圖及び寫真版皆共に精巧無比。

第一章 地形

(概説) 尾張—三河—遠江—駿河—甲斐—伊豆—美濃—飛驒—信濃) 第二章 海岸并に海岸線 (相模灣、伊豆海并其沿岸—駿河灣並に其沿岸—遠江灘及其海岸—伊勢海及伊其沿岸—海流及び潮—近時に於ける主要なる地變(濃尾大地震)第三章 地質 (一) 汎論 (二) 始原大統 (三) 古生大統 (四) 中生大統 (五) 御坂統及三倉統 (六) 新生大統 (七) 噴出岩 (八) 地體構造 (九) 鑛泉第四章 氣象 (氣温、氣壓、風向、降水量、霜雪、溫度) 高山氣象(富士氣象、御岳氣象)

第二章 沿革

(一) 石器時代 (二) 上古三尊樂朝より平安朝に至る四鎌倉時代 (五) 南北朝時代 (六) 諸族割據攻伐時代 (七) 豐臣氏の時代 (八) 徳川氏の時代 (九) 維新以後第二章 政治宗教 (一) 行政 (二) 司法 (三) 軍事 (四) 教育 (五) 宗教 (六) 交通

本 地 誌 全 部 拾 卷

總紙數約壹萬壹頁每卷地圖寫真版數十枚入

編文

第三章 産業 (一) 農業 (二) 林業 (三) 水産 (四) 工業 (五) 鑛業(金屬鑛類、非金屬鑛類) (六) 商業(商業都會、商業機關、會社事業、金融機關)

第三編 地方誌

愛知縣 概説 豐橋町 岡崎町 有松町 鳴海町 大高町 熱田町 名古屋市 清洲町 外數十
靜岡縣 概説 富士山 沼津町 原町 吉原町 大宮町 蒲原町 興津町 清水町 函山 下田町
山梨縣 概説 上野原 猿橋 大月 谷村町 日下部町 勝沼町 甲府市 昇仙峽 蘆橋外
岐阜縣 概説 岐阜市 長良川 加納町 笠松町 大垣町 關ヶ原村 高田町 養老公園 太田町
長野縣 概説 小諸町 上田町 長野市 諏訪町 飯田町 伊那町 高遠町 松本町 大町 中野町

銅版地圖

○中部地形概圖 ○富士火山頂上附近地圖 ○富士附近地圖 ○天城火山附近地圖 ○伊豆大島地圖 ○小笠原島父島地圖 ○淺間火山地圖 ○中部地質概圖 ○名古屋市街圖…(以上)

金ヶ嶽 黒富士 遠望 ○箱根 天城富士 遠望 ○天城火山 遠望 ○八丈島 遠望 ○鳥島 ○八ヶヶ嶽 遠望 ○立科山 遠望 ○硫黄嶽 根石 遠望 ○淺間火山 遠望 ○角掛山 小棧敷 ○籠の塔山 遠望 ○角掛山より南方に大棧敷 小棧敷を望む ○諏訪湖 遠望 ○御岳 頂望 ○國造配圖 ○鎌川時代 諸侯配圖 ○岡崎町地圖 ○豊橋町地圖 ○淨岡市地圖 ○沼津附近地圖 ○濱松町地圖 ○知多半島海岸地圖 ○甲府市地圖 ○岐阜市地圖 ○大垣町地圖 ○高山町地圖 ○長野市地圖 ○上田町地圖 ○松本町地圖 ○下田附近地圖 ○諏訪湖附近其他

故文科大學教授 文學博士 栗田 寛先生題詩
 文科大學教授 文學博士 三上 參次先生題歌
 理科大學教授 文學博士 田中 義成先生題詩
 文學博士 神保 小虎先生題詞
文學博士 原秀四郎先生著作

日本國史地書

附日本國史地理

全一册
 菊判上製精巧着色
 地圖壹百四十餘圖插入
 附說日本國史地理四頁
 正價 壹圓七拾錢
 郵稅 拾四錢

日本國史地圖は著者が大學院在學中の研究成績を纂輯せるものにして、卒業主論文に副へて提出し、因つて以て榮譽ある學位を得られたる、三種副論文中の隨一なる國史地圖纂の諸圖幅中に就きて其要を摘み粹を抜きて、稱其の圖面を節約し、専ら中等程度の讀史社會に參考書又は教科書に供するの目的を以て述作せるものにして其日本國史地理は之れが簡易なる解説なり。

目次

第一部 地理分叙	第九 鎌倉時代(守護地頭外五)
第二部 各論(日本中城山脈外四)	第十 室町時代(世襲守護外四)
第一 各論(陸奥吉野外十)	第十一 戰國時代(織田氏外四)
第二 各論(四代大將諸人種外三)	第十二 戰國時代(織田氏外四)
第三 各論(代氏諸國土擴張外五)	第十三 戰國時代(織田氏外四)
第四 各論(初代氏諸國土擴張外四)	第十四 戰國時代(織田氏外四)
第五 各論(朝國郡制度外三)	第十五 戰國時代(織田氏外四)
第六 各論(上(平)安京外三)	第十六 戰國時代(織田氏外四)
第七 各論(上(平)安京外三)	第十七 戰國時代(織田氏外四)
第八 各論(東國北國外二)	第十八 戰國時代(織田氏外四)
第九 各論(東國北國外二)	第十九 戰國時代(織田氏外四)
第十 各論(東國北國外二)	第二十 戰國時代(織田氏外四)
第十一 各論(東國北國外二)	第二十一 戰國時代(織田氏外四)
第十二 各論(東國北國外二)	第二十二 戰國時代(織田氏外四)
第十三 各論(東國北國外二)	第二十三 戰國時代(織田氏外四)
第十四 各論(東國北國外二)	第二十四 戰國時代(織田氏外四)
第十五 各論(東國北國外二)	第二十五 戰國時代(織田氏外四)
第十六 各論(東國北國外二)	第二十六 戰國時代(織田氏外四)
第十七 各論(東國北國外二)	第二十七 戰國時代(織田氏外四)
第十八 各論(東國北國外二)	第二十八 戰國時代(織田氏外四)
第十九 各論(東國北國外二)	第二十九 戰國時代(織田氏外四)
第二十 各論(東國北國外二)	第三十 戰國時代(織田氏外四)
第二十一 各論(東國北國外二)	第三十一 戰國時代(織田氏外四)
第二十二 各論(東國北國外二)	第三十二 戰國時代(織田氏外四)
第二十三 各論(東國北國外二)	第三十三 戰國時代(織田氏外四)
第二十四 各論(東國北國外二)	第三十四 戰國時代(織田氏外四)
第二十五 各論(東國北國外二)	第三十五 戰國時代(織田氏外四)
第二十六 各論(東國北國外二)	第三十六 戰國時代(織田氏外四)
第二十七 各論(東國北國外二)	第三十七 戰國時代(織田氏外四)
第二十八 各論(東國北國外二)	第三十八 戰國時代(織田氏外四)
第二十九 各論(東國北國外二)	第三十九 戰國時代(織田氏外四)
第三十 各論(東國北國外二)	第四十 戰國時代(織田氏外四)
第三十一 各論(東國北國外二)	第四十一 戰國時代(織田氏外四)
第三十二 各論(東國北國外二)	第四十二 戰國時代(織田氏外四)
第三十三 各論(東國北國外二)	第四十三 戰國時代(織田氏外四)
第三十四 各論(東國北國外二)	第四十四 戰國時代(織田氏外四)
第三十五 各論(東國北國外二)	第四十五 戰國時代(織田氏外四)
第三十六 各論(東國北國外二)	第四十六 戰國時代(織田氏外四)
第三十七 各論(東國北國外二)	第四十七 戰國時代(織田氏外四)
第三十八 各論(東國北國外二)	第四十八 戰國時代(織田氏外四)
第三十九 各論(東國北國外二)	第四十九 戰國時代(織田氏外四)
第四十 各論(東國北國外二)	第五十 戰國時代(織田氏外四)
第四十一 各論(東國北國外二)	第五十一 戰國時代(織田氏外四)
第四十二 各論(東國北國外二)	第五十二 戰國時代(織田氏外四)
第四十三 各論(東國北國外二)	第五十三 戰國時代(織田氏外四)
第四十四 各論(東國北國外二)	第五十四 戰國時代(織田氏外四)
第四十五 各論(東國北國外二)	第五十五 戰國時代(織田氏外四)
第四十六 各論(東國北國外二)	第五十六 戰國時代(織田氏外四)
第四十七 各論(東國北國外二)	第五十七 戰國時代(織田氏外四)
第四十八 各論(東國北國外二)	第五十八 戰國時代(織田氏外四)
第四十九 各論(東國北國外二)	第五十九 戰國時代(織田氏外四)
第五十 各論(東國北國外二)	第六十 戰國時代(織田氏外四)
第五十一 各論(東國北國外二)	第六十一 戰國時代(織田氏外四)
第五十二 各論(東國北國外二)	第六十二 戰國時代(織田氏外四)
第五十三 各論(東國北國外二)	第六十三 戰國時代(織田氏外四)
第五十四 各論(東國北國外二)	第六十四 戰國時代(織田氏外四)
第五十五 各論(東國北國外二)	第六十五 戰國時代(織田氏外四)
第五十六 各論(東國北國外二)	第六十六 戰國時代(織田氏外四)
第五十七 各論(東國北國外二)	第六十七 戰國時代(織田氏外四)
第五十八 各論(東國北國外二)	第六十八 戰國時代(織田氏外四)
第五十九 各論(東國北國外二)	第六十九 戰國時代(織田氏外四)
第六十 各論(東國北國外二)	第七十 戰國時代(織田氏外四)
第六十一 各論(東國北國外二)	第七十一 戰國時代(織田氏外四)
第六十二 各論(東國北國外二)	第七十二 戰國時代(織田氏外四)
第六十三 各論(東國北國外二)	第七十三 戰國時代(織田氏外四)
第六十四 各論(東國北國外二)	第七十四 戰國時代(織田氏外四)
第六十五 各論(東國北國外二)	第七十五 戰國時代(織田氏外四)
第六十六 各論(東國北國外二)	第七十六 戰國時代(織田氏外四)
第六十七 各論(東國北國外二)	第七十七 戰國時代(織田氏外四)
第六十八 各論(東國北國外二)	第七十八 戰國時代(織田氏外四)
第六十九 各論(東國北國外二)	第七十九 戰國時代(織田氏外四)
第七十 各論(東國北國外二)	第八十 戰國時代(織田氏外四)
第七十一 各論(東國北國外二)	第八十一 戰國時代(織田氏外四)
第七十二 各論(東國北國外二)	第八十二 戰國時代(織田氏外四)
第七十三 各論(東國北國外二)	第八十三 戰國時代(織田氏外四)
第七十四 各論(東國北國外二)	第八十四 戰國時代(織田氏外四)
第七十五 各論(東國北國外二)	第八十五 戰國時代(織田氏外四)
第七十六 各論(東國北國外二)	第八十六 戰國時代(織田氏外四)
第七十七 各論(東國北國外二)	第八十七 戰國時代(織田氏外四)
第七十八 各論(東國北國外二)	第八十八 戰國時代(織田氏外四)
第七十九 各論(東國北國外二)	第八十九 戰國時代(織田氏外四)
第八十 各論(東國北國外二)	第九十 戰國時代(織田氏外四)
第八十一 各論(東國北國外二)	第九十一 戰國時代(織田氏外四)
第八十二 各論(東國北國外二)	第九十二 戰國時代(織田氏外四)
第八十三 各論(東國北國外二)	第九十三 戰國時代(織田氏外四)
第八十四 各論(東國北國外二)	第九十四 戰國時代(織田氏外四)
第八十五 各論(東國北國外二)	第九十五 戰國時代(織田氏外四)
第八十六 各論(東國北國外二)	第九十六 戰國時代(織田氏外四)
第八十七 各論(東國北國外二)	第九十七 戰國時代(織田氏外四)
第八十八 各論(東國北國外二)	第九十八 戰國時代(織田氏外四)
第八十九 各論(東國北國外二)	第九十九 戰國時代(織田氏外四)
第九十 各論(東國北國外二)	第一百 戰國時代(織田氏外四)

東京 博文館

海軍戰術上の教典

トラフアルガルの海戰、佛西兩國の聯合艦隊を撃滅し、身もまた戰陣中に壯烈なる戰死を遂げたるも、此の空前なる大勝を以つて、英國は世界第一の海軍國と爲り、爾來一百年間、渾圓球上また英國の鼎の輕重を問ふ者無し。實に現時英國富強の根源を原ぬれば、ネルソン提督の殊勳は、與つて多きに居る、宜なる哉今に至るまで英國のみならず、世

米國 海軍大佐 エー、テイ、マハン 君著
 日本 從六位 大島 貞益 君譯(海軍教育本部藏版)

英提督 ネルソン 傳

肖像十七圖海戰地圖貳拾貳枚挿入

界を擧げて萬世不滅の海軍々人として提督を尊敬するをや。而して提督の事蹟を詳にせんと欲せば實に此書に勝るは無し。原書は方今世界海軍界の戰術家米國マハン大佐が非凡なる戰術眼を以て、提督の偉勳を叙述論評せられたる者なり。眞に海軍の教典、軍人の師表とも見るべく、また英國近世の大飛躍史とも稱すべし。

全一册洋裝菊判
 上製金文字入
 紙數千三百頁
 正價壹圓六拾錢
 小包料金貳拾錢

發兌 元 東京市日本區本町三丁目 博文館

文學士 久保天隨君著

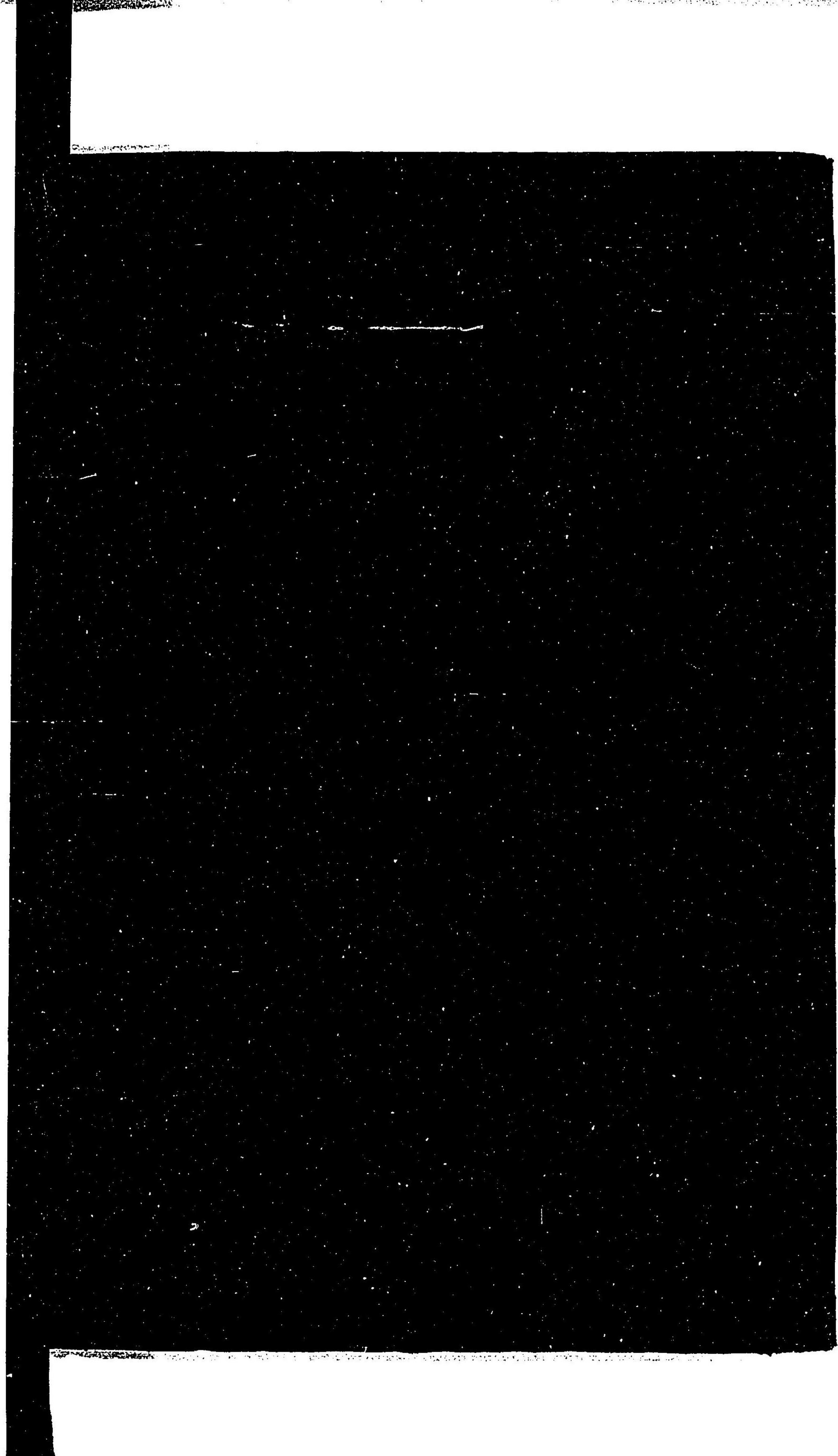
日本歴史寶鑑

全一冊洋裝菊判
總クローズ特製
紙數千六百頁
正價金參圓
小包料參拾錢

著者の博洽該實、殊に史學に精通し、獨創の所見に富むこと、世史の參考に供せむが爲に、緻密なる注意を以て纂述せしもの、鉅細悉く幽顯すべしにして、はじめに綱目を擧げ、次に個條的に之を細述し、**鉅細悉く幽顯すべし**、筆を太古に起して、**最近日露戰役**に及び、治亂盛衰の外、人文史上の**材料精確**、**引證該博**、**秩序整然**とし、**筆力犀利**。加ふるに、數種の索引したれば、その使用如何によ、**歴史辭書**たるべ、**中等教育**に關係ある者は固りては、又完全なる一個の**眞に寶鑑**といふべきなり。

發兌元 東京市日本橋區 博文館

477
260



(M)

022617-005-8

77-260

大日本地誌

佐藤 伝蔵 / 編

卷5

M36-T4

ADB-0325

